

当院における転倒対策チームの活動について About activity of fall measures team in this hospital

○安部 優樹¹、生野 和徳²

¹ 社会医療法人 敬和会 大分岡病院 総合リハビリテーション課、

² 社会医療法人 敬和会 大分岡病院 医療安全推進室

当院の転倒対策チームは2015年10月に発足し、現在は看護師18名、リハビリスタッフ10名、公認心理士1名で構成されている。当院のレポート報告の約22%を転倒転落が占め、転倒転落対策の実際は各診療科・各スタッフで様々であり医療安全推進室としては対策の整備・標準化が課題となっていた。全診療科共通のルールを作成するために過去の事例分析を行ったところ、約60%の事例は認知機能低下疑いであることが判明した。認知機能が低下している場合ナースコールボタンを押せずに行動することがあり、身体活動レベルの低下があると転倒転落に繋がるためナースコール鳴動物品を設置する。しかし3種類の物品の選択基準はなく特徴が活かされていなかったため、身体活動状況と併せた用具選定基準を作成した。この用具選定基準は「認知機能の低下が疑われる」から始まるが、認知機能評価はリハビリスタッフが介入しなければ行われなかったため、入院後早期に行える「転倒転落対策に必要な簡易認知機能評価ツール」の作成を試みた。リハビリスタッフが行った40例の認知機能評価(HDS-R)の結果を無作為に抽出し、総得点と各項目に関連性がないかを検討したところ年齢・日付・想起に減点傾向がみられたため、ナースコールの使用と組み合わせ運用を開始した。この評価ツールと用具選定基準が院内統一のルールとして業務定着するには期間を要したが、転倒対策チームによる隔週の転倒対策ラウンドや毎月の定例ミーティング、職員全体研修等で運用のアピールを行った。また本体位置や配線等の理想的な設置方法についても同様に行ってきたところ、転倒転落発生率(千分率)は4年間で2.57‰から1.27‰へ、損傷発生率は0.57‰から0.34‰へ低下した。今後も他職種で協働し1人1人の患者さんに適切な転倒転落予防策が行われ、転倒転落の発生・重症化予防に取り組んでいきたい。